

## 南部沼公開トレンチ調査の結果明らかにされた巨大津波痕跡の産状と層序 - 根室海岸地域における巨大津波痕跡調査 (速報3)

### Large tsunami traces in Nanbutou marsh: The research of tsunami traces along Nemuro coastal zone (Preliminary report 3)

# 添田 雄二 [1]; 七山 太 [2]; 重野 聖之 [3]; 石井 正之 [4]; 古川 竜太 [5]; 猪熊 樹人 [6]; 中川 充 [7]; 山口 桂賜 [8]; 長友 恒人 [9]; 鈴木 琢也 [1]; 右代 啓視 [1]; 山田 悟郎 [1]

# Yuji Soeda[1]; Futoshi Nanayama[2]; Kiyoyuki Shigeno[3]; Masayuki Ishii[4]; Ryuta Furukawa[5]; Shigeto Inokuma[6]; Mitsuru Nakagawa[7]; Keishi Yamaguchi[8]; Tsuneto Nagatomo[9]; Takuya Suzuki[1]; Hiroshi Ushiro[1]; Goro Yamada[1]

[1] 道開拓記念館; [2] 産総研 地質; [3] 明治コンサルタント株式会社・北海道支社; [4] 明治コンサルタント・北海道支社; [5] 産総研; [6] 根室市歴史と自然の資料館; [7] 産総研・地調・北海道; [8] 日本野鳥の会; [9] 奈良教育大学

[1] Historical Museum of Hokkaido; [2] GSJ/AIST; [3] Meiji C; [4] Meicon Hokkaido; [5] AIST; [6] The Introduction of Nemuro City Museum of History; [7] Hokkaido Branch, GSJ, AIST; [8] Wild bird Society of Japan; [9] Nara University of Education

<http://www.hmh.pref.hokkaido.jp/>

北海道東部太平洋沿岸域は、七山・重野（1998）による報告以来、完新世に堆積した泥炭層および湖沼堆積物中の津波堆積物に関する研究が活発に行われてきている。これによって、十勝海岸～霧多布湿原間の巨大津波痕跡層序は概ね確立されたと考えて良い（例えば、Nanayama et al., 2003）。しかし、根室海岸地域においては、未だ不確定な部分が多い。2005年10月中旬に、根室市市街地に近接した南部沼において、巨大津波痕跡トレンチ調査を実施し、根室市民に公開した。この際、新たな知見が得られたのでその概要を報告する。

今回、南部沼地域において、以下の手順で調査を実施した。最初に、推定される津波遡上方向を考慮し、現汀線から湿原を横断する道路に沿って測線を設定した上で、汀線からの距離の測定と水準測量を実施した。重機を用いて、最大で幅2.7m長さ14.4m深さ2.7m規模のトレンチを7ヶ所で掘削した。このうち、最も海側のトレンチは汀線から約490m最も内陸のトレンチは汀線から約970mに位置している。

南部沼地域において、最も厚いところで約2.2mの泥炭層が発達し、泥炭層中に6層の火山灰と15層の砂層を確認することが出来た。火山灰は主にシルト～細礫サイズであり、肉眼観察と周辺地域の既存火山灰層序研究から、Ta-a（1739年樽前山起源）、Ko-c2（1694年駒ヶ岳起源）、Ma-b（10世紀摩周起源）、B-Tm（10世紀白頭山起源）、Ta-c2（ca. 2.5 ka 樽前山起源）、Ma-d（ca. 4.3 ka 摩周起源）と推定された。

15層の砂層（Tn1~15）は主に淘汰の良い細粒砂からなり、一部に径2～3mmの礫を含む。最大10.6cmの垂円～垂角礫を含む場合もある。これらの層厚は数cmから数10cmであり、最大で95cmに達するものも存在する。各砂層は、明瞭な浸食基底を持ち級化構造を示し、平行葉理やカレントリップルのような流水によって生じた堆積構造を示すものも認められた。

今回のトレンチ調査の結果、Ta-c2からKo-c2までの間に8層の巨大津波痕跡が確認されたが、これは十勝海岸～霧多布湿原で確認されている同時代の巨大津波痕跡よりも2層多く、別報する根室市南西のガッカラ浜や別当賀トレンチの枚数と一致する。また、これらの砂層分布域は1894年や1973年根室沖地震津波の浸水域を大きく上回っている。これらの事実から、霧多布湿原以東の太平洋沿岸地域においては、十勝沖+根室沖の運動型地震による津波波源以外にも、新たに歯舞・色丹島側にも波源を想定する必要があると考えられる。

引用文献 七山・重野, 1998, 月刊地球号外, no.15, 177-182; Nanayama et al., 2003, Nature, 424, 660-663.